

都市遺産を考える

— 次代に引き継ぐ物語 —

池田 誠一

【4】近世の名古屋 1 …⑤名古屋城
⑥碁盤割の街

1 「名古屋」築城

近世初期の名古屋の遺産といえば、まずは名古屋城とその城下町でしょう。徳川家康は、1609年、山下氏勝の提言を受けて急遽、尾張「新」城のプロジェクトをスタートさせました。家康はすぐ現地に来ると、①小牧城趾、②古渡城址、③那古野城址の三つの候補地の中から、那古野築城を決めています。そして縄張りを定め、翌年の初めには諸大名に助役を命じました。ここに新しい名古屋城が生まれることになったのです。

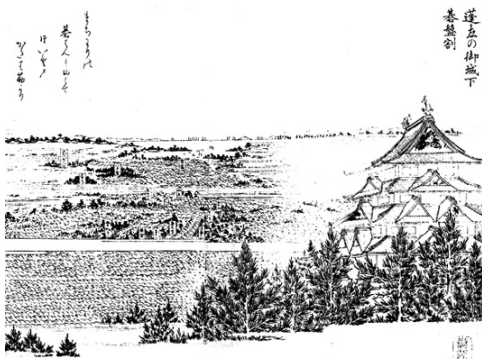


図1 『小治田真清水』に描かれた碁盤割の名古屋城下

名古屋城は、焼失前は日本近世の城郭の最高峰とされた城です。また城下町も、正面に碁盤割の町人町を据えた、画期的な都市でした(図1)。

さらに家康は、城下の弱点であった水運のための河川の不足をカバーするため、少し離れた熱田湾から運河の掘削を命じました。堀川です。そして清須から名古屋へ、寺社から町人まですべてを引っ越すことにしました。いわゆる「清須越」といわれる大事業です。

今回は、このようにして建設の始まった近世都市・名古屋の建設プロジェクトをみてみたいと思います。

2 到達点の「城」と「街」

(1)名古屋城…近世城郭の完成型

名古屋城を見る視点はいくつかありますが、広い意味で重要なのは、城郭史上の位置づけではないでしょうか。

近世城郭史のスタートは、中世、南北朝時代に始まります。中世の城は、まずは①平野

時代	拠点・圏	主眼	リーダー	城下の形・機能	形成
中世	屋敷				
	山城	防御		集落	「兵士」
	↓	↓	信長	落	「家臣」
戦国	↓ 惣構	↓	↓	街	「町人」
国	平城	統治	秀吉	並	...
	↓ 惣構	↓	↓	都	「身分」計画
	↓	↓	家康	市	「開放」
近世	↓	↓	↓	近世城下町	↓

図2 日本の近世城郭の変遷モデル

にあった「居館」の防御を強化することでした。しかし攻撃力が大きくなると、防御に適した、②山岳とか池川沿いに移行しました。いわゆる「山城」です。ところが戦争の規模が大きくなると物資の調達や職人の確保が重要になり、③平地に近い「平山城」が多くなりました。そして、信長、秀吉による天下統一が進み、領国統治と配置換えが多くなると、その機会に、再び、④平野の真ん中の「平城」へと戻ることになったのです(図2)。名古屋城は、このような段階の時に造られた城でした。

ところがその完成直後の1615年に、一国一城令が出されました。領国内の城は一か所に固定されるとともに、新城の築城も不可能になりました。我が国の近世城郭史はそこで止まってしまいました。このため名古屋城は近世城郭最後の大型城郭になったのです。加えて、最高権力者・家康が、財に糸目をつけずに、最大・最高の城を築いたのが、名古屋城だといえます。

名古屋城の面白い点は、想定される豊臣方との戦いに備えつつ、その敵方に命じて築城されたことです。したがって当然、戦略上の細工を弄することはできません。正々堂々とした巨大且つ強固な、今日風にいえば、「抑止力」としての城が計画されることになりました。その例は本丸の門に見られます。①枳形と②堀のある馬出しを造り、それを③多門櫓で取り囲みました。極めて攻略困難なもの

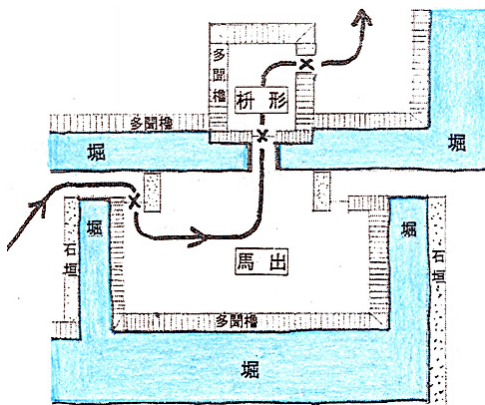


図3 本丸正門の構え。外から攻め入るには、敵に囲まれ、背を向ける箇所が幾つもある

です(図3：明治時代に破却されました)。

そして最後に、威圧のシンボルとして屋根の上に輝いたのが、金の鯨だったのです。

(2) 碁盤割の街… 王都の町割り

名古屋城の大手正面には、碁盤割の町人町がつくられました。碁盤割とは、街の街区を碁盤の目のように正方形にするものです。

家康は、城下づくりではこの碁盤割にこだわりを見せています。しかし、江戸では大手門前が狭くてカーブした帯状になり、駿府で

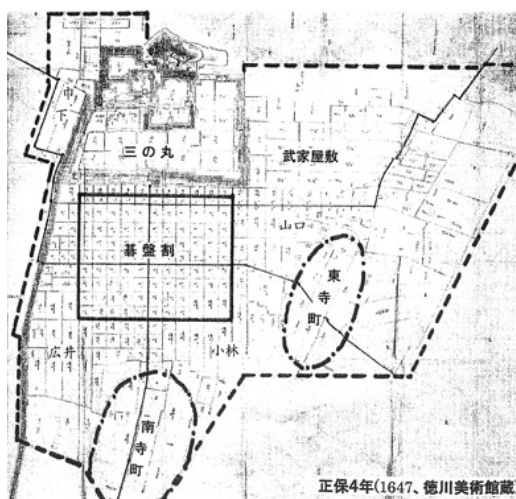


図4 名古屋城下の概要。
城の大手筋の正面に、碁盤割の町人町がある

は小規模にしかできませんでした。そして最後に実現したのが名古屋城下だったのです(図4)。

なぜ家康が碁盤割にこだわったかは、理由が考えられます。目指したのは、古代の平城京、平安京というよりも、家康ならば中国古典で王都のモデルとされた『周礼』や、それを具体化した長安でしょうか。それらの街は、すべて正方形の街区で構成されていました。日本でもそれを見習って、藤原京に始まり平安京へと碁盤割の都が続きました。中世になってそれを失ったのは、戦争に備え防御を優先したことと、その学識が亡くなったからでしょう。しかし、泰平の世が見通せるようになると、平和志向の学識者・家康はそれを復元しようとしたのだと考えられます。

とはいっても、実は今日でも、碁盤割の街は多くはありません。それは良い宅地割ができないからです。古代の王都は一宅地が大きく、可能でした。しかし江戸時代の商家ぐらゐの敷地ではうまく割れず、正方形街区とするには相当の余剰地を覚悟しなければなりま

せんでした(図5)。

名古屋城下は、城の正面に、1辺60間位の正方形街区が、9×11区画つくられました。そしてそこは、武士ではなく町人の街としたのです。中央の道路は本町通と呼び、まっすぐ熱田社に向かいます。宅地割の結果、真ん中にできた余剰地は、名古屋では「閑所」と呼びました。始めは公共的空間としての利用でしたが、その後その空間を利用して、多くは寺院が入っています。

こうして名古屋は、古の王都の伝統を引く、「正々方々」の碁盤割の街という極めて珍しく、そして格調の高い都市になったのです。

(3) その他

<堀川>

都市が経済的に発展すると、物流が重要な意味をもつことが想定されました。家康は、名古屋台地に城下を展開するにあたって、湊から城下への運河の建設を命じました。今日の堀川です。

城下に運河を通すことは珍しいことではあ

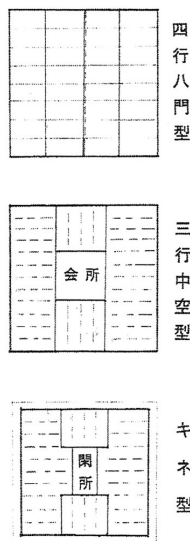


図5 正方形の街区の宅地割。多くは中央に空き地ができる。名古屋では閑所と呼んだ

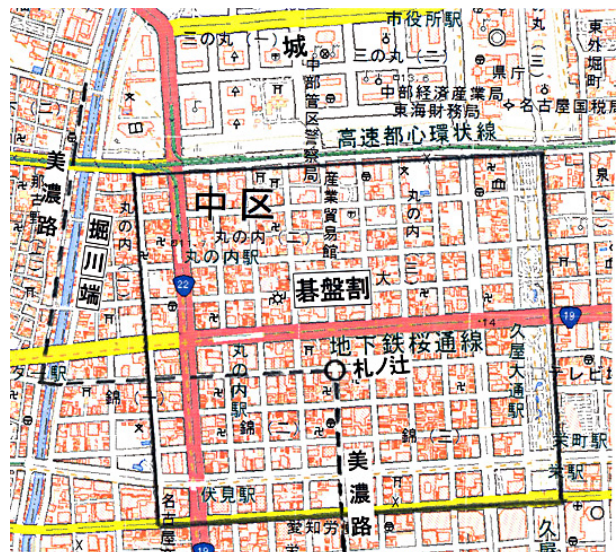


図6 堀川端と碁盤割と、それをつなぐ美濃路。
この両側に店が並んだ

りません。たとえばその25年ほど前に、豊臣秀次のつくった近江八幡城下では、琵琶湖から運河を掘り八幡堀と呼んでいます。

名古屋城下のユニークだったところは、その運河・堀川と国土の幹線道路・美濃路をリンクさせたことです。美濃路を、堀川沿いを通した後、碁盤割の街に引き込み町の中心と結びました(図6)。美濃路は、北は中山道に、南は東海道につながります。このため堀川と碁盤割の商店街は水運、陸運が一体となり、商圈の拡大にも大きな効果が出るようになったといえます。

<清須越>

新しい都市・名古屋の仕上げは、各地からの住民の引っ越しでした。最も大きかったのは、旧城下の清須から。次は、藩主義直の居住地の駿府からでした。

当時、新城の築造には、旧城下等からの住民の引っ越しは通例のことでした。秀吉の大坂城には堺の街が移されており、近江八幡城では旧城の安土から町名毎、引っ越ししています。

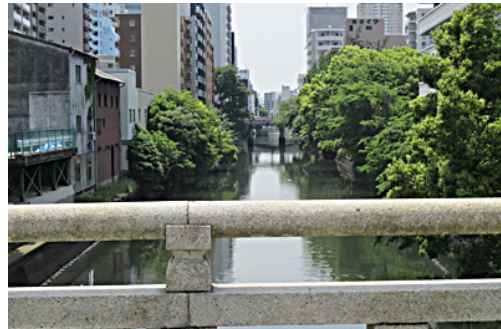
清須から名古屋への引っ越しは、本来、名古屋越といえるものですが、新しい都市側で出身地を区別するため、清須越の…、駿河越の…、と呼ばれるようになったのです。清須は、当時では大きな都市で、その引っ越しの規模は、全国でも1、2を争うものだったといえます。

3 紀行 碁盤割の街

… 名古屋都心を代表する街区 …

それでは、堀川を歩いて碁盤割の街を歩いてみます。

<堀川端から>



五条橋から南をみた堀川

地下鉄の丸の内駅の8番出口を出ます。すぐ前の道が茶屋町筋です。そこを、まず左に曲がります。少し進むと坂を下り始め、堀川の五条橋になります。堀川の水質は分かりませんが、景観は立派です。

橋を渡ってすぐの道を左に曲がります。この細い道が、江戸時代の国道だった美濃路です。少し先の両側に黒っぽい家が見えます。築城時からの商店だった川伊藤家です。左側の建物は、直接、堀川とつながっています。

次の角で寄り道をして、四間道(しけみち)と呼ばれるところを見てみましょう。右に、またすぐ右に曲がると四間道の道標があります。先に進むと右側に白い壁の家が並びます(一部補修工事中)。西側の密集地からの火災を街に延焼させないために、道幅を広げ、土盛りし、高い漆喰の白い壁を連続させたのです。

さて美濃路に戻り、南に進みます。桜通を



四間道の白い壁。

左側からの火災に対し町を守った



伝馬橋からやや上がって伝馬町通になる。
この両脇に物流関係の店舗が多かった

越えた、次の角を左に曲がると伝馬橋です。五条橋付近からこの南側一帯には、水運に関係する商店等が並びました。美濃路はここで左に橋を渡って、少し坂を上り、碁盤割の街に入ります。道は伝馬町通といい、碁盤割地区の南北の中心になる道です。

今の碁盤割地区は、戦災復興で道路が拡幅され、6 ㍍程の道が、15と20㍍になっています。まっすぐに、国道は渡れないので迂回して進むと、500㍍程で、碁盤割の中心地、札ノ辻と呼ばれた角に着きます。西北角には、その地点の尾張名所図会のプレートが置かれています。ここは城下に引き込まれた美濃路の名古屋宿の中心でもあって、伝馬や飛脚の拠点がありました。交差する南北の道路が城下の中心、本町通です。

この角から一本南に行き、右に曲がった所



「閑所」に入った寺院の例。
今は周囲をビルに囲まれている

にある福生院は、碁盤割の閑所が寺になって残った一つの例です。

<碁盤割東南端へ>

札ノ辻からは、本町通を北に進みましょう。すぐ桜通で、少し左に行ったところに時の鐘を突いた桜天神社があります。



碁盤割の中心で、名古屋宿の中心でもある札ノ辻



江戸時代、時の鐘を打った桜天神社。
その塔の模型が置いてある

通りを渡って北に進みます。城下の中心の通りですが、今はその面影は残りません。桜通を越えて4本目の道が、城に近く、碁盤割最高の格を誇った茶屋町筋です。当時は有力商人茶屋家や伊藤家がその角を占めました。

さてここから東南に向け、碁盤割地区をジグザグに歩いてみましょう。まず東に茶屋町筋を進みます。次の角を曲がると七間町通です。ここからの南北の区画は、家康から城と街を近づけよという修正指示が出て、間隔が20間伸びたため、途中に小路が入りました。



茶屋町筋から本町通の南を見る。
まっすぐな計画道路であることを実感する

その次の角を左に曲がると魚の棚筋です。

当時の街名のつけ方は、城から見える通りが「通」とし、それに交差する通りは「筋」と呼ぶことが通例で、名古屋城下もそれに倣っています。次の角を右に曲がると南北の呉服町通です。戦災復興の完成時、町名を変更したとき、大きな反対運動があって、通りの名を残すということで決着しました。そのため各交差点には通り名の表示が残ります。

次の角を左に曲がると、杉ノ町筋。右に曲がると伊勢町通。そして次の道が桜ノ町筋(桜通)です。大きな交差点を曲がると大津町通、次が伝馬町通になり、1本先で百米道路につき当って、右折した歩道が関鍛冶町通になります。左折してテレビ塔横の百米道路を横断(袋町筋)すると、反対側の歩道は、碁盤割地



碁盤割の東南角。現在は中日ビルの西北角になる

区の東端、久屋町通になります。東端を南に、錦通を渡って堀切筋(広小路通)に出ます。ここが碁盤割地区の東南端の角になります。広小路は17世紀後半、公称15間に拡幅されたものです。

4 壁のない都市

戦国時代の終わり頃、城は防御のために城下も堀や土塁で囲う、「惣構え」という形式がとられるようになりました。大坂城、江戸城を始め、近くでは清須城や犬山城など、皆、惣構えになりました。

ところが家康は、名古屋城を惣構えにはしませんでした。天下泰平の世には無用なものだからです。もちろん、川には橋を架け、道はまっすぐです。そこには、家康の「戦争の世を終わらせる」という強い意志があったからでしょう。

17世紀の初め、世界にそのような都市はあったでしょうか。中国も西欧も、都市は高い壁で囲むことが当たり前だったのです。よく、外国と日本の都市の違いに、壁の有無を指摘されることがあります。実は、日本の都市も江戸時代の初めまでは壁に当たるもの(堀)があったのです。日本は外国よりも先に平和になって、その壁が順次取り除かれていきました。壁のない名古屋は、平和都市の最先端だったともいえるのです。

〈主な参考文献〉

- ①玉置豊次郎『日本都市成立史』
(1974、理工学社)
- ②同編集委員会『新修名古屋市史3』
(1999、名古屋市)
- ③池田誠一「開府名古屋の都市づくり」
(2010、中部電気協会)